「好適空間論」授業の展開と成果

黒野伸子 [1],小宮富子 [1],祝田　学 [1],西元照幸 [1]
林　陽子 [2]

Nobuko Kurono[1],Tomiko Komiya[1],Manabu Houda[1],Teruyuki Nishimoto[1],Yoko Hayashi[2]

［要旨］本稿は、５名の教員による「好適空間論」の授業実践から、その成果を報告するものである。「デンマーク人の暮らし方」では、学生は、デンマークでの人々の暮らしに共感し、好適な空間が幸福な暮らしと関係が深いことを理解できた。「好適空間とコミュニケーション」では、空間とコミュニケーションに関する事例の紹介などを通して「好適空間論」の広がりと日常生活との関連性についての学生の認識を一定程度高めることができた。「地球の現状とエコ感覚」では、地球の置かれた現状を概観し、「教育」の重要性を提言した。「医療空間」では、医療空間の構築を通して、医療環境の在り方を理解したことが示唆された。「商空間」では、デンマークの好適空間との対比において、現在の受講生自身が置かれた「好適空間」のありかたを見直すきっかけを提示できた。総じて、本授業を通して、学生が「hygge」を取り入れるきっかけができたと考えるものである。

［キーワード］デンマーク人の暮らし、コミュニケーション、地球環境、医療空間、商空間

［Key words］Danish life , Communication , Global environment , Commercial space, Medical space

［所　属］ 1 岡崎女子短期大学（Okazaki Women’s Junior College）,2 岡崎女子大学（Okazaki Women’s University）

１．はじめに

本稿は、「好適空間論」の授業実践から、その成果を報告するものである。本授業は、全 15 回で構成され、5 名の教員により担当した。以下、授業の目的と到達目標を 2020 年度シラバスから抜粋する。

【授業の目的】

岡崎女子短期大学は「子ども好適空間研究拠点」として文部科学省より「私立大学研究ブランディング事業」の選定を受け、子どもにとって「好適な」空間の研究を推進している。本授業ではこの研究を応用し、子どものみならず、すべての人にとって安全で居心地が好く、夢中になって活動が出来る「好適空間」の概念を理解し、社会人として、家庭人として、望ましい空間を創造出来る能力を修得する。またデンマーク語の「hygge」の概念について知り、自らが居住する空間や執務を行う空間に「hygge」な要素を取り入れることについても学ぶ。

【授業の到達目標】

・「好適空間」の要素を説明する事が出来る。
・空間を構成するために必要な要素を理解している。
・住空間、オフィス空間、医療空間の現状と最新事例を理解している。
・「hygge」の概念を理解し、暮らしの中に「hygge」の概念を取り入れる事が出来る。

授業担当者と、各回のテーマは以下の通りである。授業は 1-5 回及び 14 回が遠隔､14 回を除く 6-15 回は対面で実施した。

第 1 回 黒野：ガイダンス
第 2 回 西元：「地球環境」について学ぶ
第 3 回 西元：「日本の環境」について学ぶ
第 4 回 西元：「SDGs」の動きについて学ぶ
第 5 回 西元：「どのように貢献できるか」について学ぶ
第 6 回 小宮：「好適空間」とコミュニケーション

第 7 回 祝田：住宅市場と住宅の購入について
第 8 回 祝田：住宅販売の現状について
第 9 回 祝田：オフィス空間の歴史と事例研究
第 10 回 祝田：サービス業における空間利用と事例研究
第 11 回 黒野：医療空間の要素について
第 12 回 黒野：医療空間の現状と問題点
第 13 回 黒野：医療空間構築の事例研究
第 14 回 林：“何してる？”“hygge してる！”－デンマーク人の暮らし方
第 15 回 黒野：最終レポート作成

次章より、各授業担当者が実施した内容と成果を報告する。

2．何してる？　hygge してる　―デンマーク人の暮らし方―

令和 2 年度「好適空間論」の 14 回目の授業は「何してる？hygge してるーデンマーク人の暮らし方―」と題し、デンマークでの人々の暮らしに焦点を当てながら、好適な空間が幸福な暮らしと関係が深いことを理解することを目標に、授業内容を組み立て実施した。本授業のタイトルは、デンマーク人の家庭にホームステイをした体験のある筆者の知人から聞いたエピソードの一部である。

以下、授業概要及び学生のデンマーク人の暮らし方への共感の内容、授業目標の達成度について報告する。なお、本授業は印刷物の配布とレポート提出による遠隔授業によって実施した。

2-1　授業の目標と概要

本授業の大目標及び小目標を以下のように設定した。

(1) 大目標：好適な空間が幸福な暮らしと関係が深いことについて理解できる。

（2）小目標

①デンマークが幸福度の高い国であることについて理解できる。

②hygge（ヒュゲ・ヒュッゲ）な暮らしについて考えることができる。

授業は、資料を読んで課題について考えたり自分で調べたりする自習形態による 70 分間の学修と、記述に 20 分を要することを想定してのレポートから成る 90 分の授業として構成した。資料は、写真を多用し、平易な言葉による解説になるように心掛けた。学修内容の主なテーマは以下の 5 事項である。

（1）筆者のデンマークでの体験エピソード紹介
（2）デンマークの位置等様々な情報の確認
（3）幸福度ランキングの紹介（日本とデンマークとの比較）

【資料例 1】

> デンマークと聞いて思い当たることのひとつが
> **幸福度が高い**
> ☆2019 年度　国連世界幸福度ランキングによれば
> 1 位　【　　】
> 2 位　【　　】
> 日本は【　　】位

> 幸福度とは何を基準にしているか
> 1）一人当たりの GDP
> 2）社会的支援
> 3）健康寿命
> 4）人生の選択の自由度
> 5）社会的寛容
> 6）社会の腐敗度

（4）筆者が訪問した郊外幼稚園の紹介
（5）筆者の体験を通じて感じたデンマークの人々の暮らし事情

図 1 【資料例 2】クリスマスシーズンの民家の窓辺（筆者が訪問したデンマークでの一風景）

2-2　受講生の共感の内容

資料を熟読・理解し、関連する情報について考察した後、「デンマーク人の暮らし方の中で共感できる生き方や暮らし方を 5 項目書きなさい。」の課題に自由記述形式で回答することを求めた。

56 人の受講生のうち、55 人は 5 項目を、1 人が 4 項目を記述した。結果、述べ 279 件の共感できる事項が収集できたので、それらについて分析を試みた。279 件の記述について、中核となるカテゴリーを抽出したところ、以下の 6 項目に分類することができた。

表 1　共感の内容（延べ 279 件）

共感した項目	件数
（1）デンマーク人の暮らし方・働き方に共感	86 件（30.8%）
（2）デンマーク人の人生の規範や価値観、生き方の哲学に共感	65 件（23.3%）
（3）デンマーク人の家族・友人等との人間関係や活動の重視に共感	50 件（17.9%）
（4）デンマークのエネルギー・資源問題への対応に共感	39 件（14.0%）
（5）デンマークの社会保障・社会福祉・教育保証に共感	22 件（7.9%）
（6）その他	17 件（6.1%）

受講生の回答は、上記のそれぞれの項目において、実際には具体的かつ詳細な内容が記載されている。例えば、(1) デンマーク人の暮らし方・働き方は、以下のような内容であった。

①働き方、労働時間（31 件）②花を飾る、キャンドルを灯す等の具体的な暮らし方（14 件）③自然とのふれあいや日常生活に自然を取り込む（15 件）④ゆったりとした暮らし方や上手な時間の使い方（8 件）⑤hygge を基準とし hygge な生活を求める（12 件）⑥心地よい住まい方や時間の流れ（6 件）

中でも興味深い記述の一例として、次に紹介する。「仕事に縛られすぎない。労働時間が短く限られた時間でどれだけ効率的にすませて自分たちの自由時間もしっかりと確保する所が良いと思った。」

また、(2) のデンマーク人の人生の規範や価値観、生き方の哲学には、男女平等・公平な社会・社会的寛容、自由な人生の選択等が挙げられている。

興味深い記述として次のような内容がある。「デンマークの人は『人より得をしたい、幸せになりたいと』と考えるよりも、『みんなが幸せならそれでいい』という思いがあるそうです。」

デンマークは、福祉社会のイメージのみならず、今日では、エネルギー問題や資源問題においても国際的に評価されており、受講生は、このようなデンマークの社会のあり方に共感を覚えたと言えよう。

2-3　授業目標の達成度

レポートの最後に、自己評価による授業目標の達成度を回答してもらった。その結果は、表 2 の通りである。

この結果から分かるように、受講生は、大目標についても小目標についても、ほぼ、当初の目標を達成したと思われる。

表 2　目標達成度（受講生 56 人の自己評価）

目標	とても	少し	あまり	全く
（大）好適な空間が幸福な暮らしと関係が深いことについて	40 人（71.4%）	16 人（28.6%）	0 人	0 人
（小 1）デンマークが幸福度の高い国であることについて	49 人（87.5%）	7 人（12.5%）	0 人	0 人
（小 2）hygge（ヒュゲ・ヒュッゲ）な暮らしについて	37 人（66.1%）	18 人（32.1%）	1 人（1.8%）	0 人

2-4　考察

2020 年度の「好適空間論」の授業は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、第 14 回目にあたる本授業は、印刷した資料を用いての遠隔授業で実施した。1 回のみの授業を遠隔で実施することについては、学生の興味や関心が直接的に把握できず、理解力についても判断できないままであったので、

どの程度目標が達成されるか、大いに不安であった。

しかしながら、写真を多用し、丁寧に説明を加えた資料を作成、配布したことで、授業目標は達成できたと思われる。紙面の都合で、共感の内容を一部しか記載できなかったが、学生は、デンマーク人の暮らし方に共感を覚えたようである。特筆すべきは、デンマークが幸福度の高い国家である、との評価の拠り所のひとつが、彼らの人生の価値観や生きる哲学と大いに関係していることを、学生が「共感」という心の動きで理解できたと思われることである。

今後、更に学びを深めて、各自が自分らしい好適な空間、時間そして人間関係をコーディネートできる人になっていくことを願っている。

3．好適空間とコミュニケーション

3-1　本章の視点

本章では、「好適空間論」授業（全15回）のうちの第6回授業「好適空間とコミュニケーション」のねらい、当該授業の背景をなす学術的研究、当該授業の展開内容、学生の反応や理解などについて論じ、本授業回が「空間とコミュニケーションの関係」について学生のどのような学びを引き出し得たかについて考察する。

3-2　「好適空間とコミュニケーション」授業回のねらいと展開

「好適空間論」は多様な視点から好適空間を論じるものであり、第2回から第5回までは地球環境やＳＤＧｓなどのマクロな視点からの講義がなされたが、第6回授業「好適空間とコミュニケーション」では、より生活に密着したミクロな視点から「空間構成が人と人のコミュニケーションに与える影響を知り、好適空間づくりのヒントを考えること」をねらいとする授業を行った。

授業展開としては、学生が①背景となる学問領域の基礎概念を知る②教室での席取りと学習との関係、職場のレイアウトと仕事の関係に関する研究事例を知る③非言語コミュニケーションの重要性と望ましいコミュニケーションスタイルを知る④コロナ禍と空間の関係を考える⑤空間と人間の気持ちの相互作用について考えレポートを書く、などの要素で構成し、講義形式にて実施した。

3-3　「好適空間とコミュニケーション」に関連する学問領域と先行研究

空間とコミュニケーションの関係については、空間生態学、環境心理学、コミュニケーション論、異文化コミュニケーション論などで様々な研究がなされているが、本授業では、主に環境心理学（佐古・小西2007[1]、芝田2016[2]、羽生2019[3]や異文化コミュニケーション論に基づく基礎概念の解説を行った。

（1）空間と心理の関係

a　距離調整行動：人間や動物にとって他者との距離には意味があり、他者の接近を警戒する「臨界距離」が存在している。

b　対人距離：エドワード．T．ホール[(1)]が提唱した4つの対人距離（密接距離・個体距離・社会距離・公衆距離）の区別は広く知られている。

c　クラウディング：混み合い感の高さが動物の疾病を引き起こした事例なども知られているが[(2)]、空間密度よりも社会密度の方が混み合い感に影響すると言われている。

d　テリトリーとパーソナルスペース：個体が他者の接近を容認/回避できる専有領域を意味する概念であり、テリトリーは固定的な居場所を指し、パーソナルスペースは個体と共に移動する性質を持っている。

我々が日常的に経験しているこれらの事象について、多年に亘り学術的な研究が重ねられていること、また「好適空間論」がそのような学問的背景との関連性を持つものであることを学生に指摘しておくことは重要であると思われる。

3-4　事例紹介

空間とコミュニケーションに関する上記のような基礎概念を紹介した後、学生にとってより身近な事例の紹介を行った。

（1）教室での座席位置と学習の関係

学生の教室での座席の位置と授業に対する積極性に相関性があることは、多くの教師が体験していることである（小宮1991：62）[4]。例えば、2019年度に筆者が担当した某大学での補習講座で、ある日学生達が不自然なほど教室の後部に集まって座り、妙によそよそしい違和感を覚えたことがあった。普段元気の良い学生達がその日はなぜか浮かない顔をしていた。良く聞いてみると、その頃は学内行事

が重なり、十分な課題予習ができていないため、どの学生も教師から当てられたくないという逃げの気持ちになっていたとのことであった。座席の位置がまさに学生達の不安を反映していたわけであり、本授業回でも、教室での座席と学習心理の関係を示す興味深い事例として紹介した。

（2）職場のレイアウトとコミュニケーション

職場のレイアウトが働き方やコミュニケーションに影響を与えることも良く知られているが、本授業回では、主に稲水（2008）[5] の研究事例を紹介した。稲水はX社におけるオフィス密度の変化と働き方の変化を3段階に分けて比較している。

第1段階は、自由席でパーティションの無い「ノンテリトリアル・オフィス」の採用段階である。導入時は部署やグループを越えた会話や仕事が弾み、他部署の協力も得やすいというメリットが見られたという。しかし第2段階では、社員の増加により自由席のデメリットが浮上する。席が取れない。他部署の声が聞こえて落ち着かない。誰の隣になるか分からず不安になる、などの問題が生じた。第3段階では、ノンテリトリアル方式のまま広いオフィスに移転したが、結局、同じ部署の成員だけで集まり、他のグループとの交流は減少し、自由席の意味が薄れたとのことであった。自由席と固定席それぞれに良さがあると稲水は指摘しているが、ノンテリトリアル・オフィスの長期固定化には難しさがあるのかもしれない。

3-5　非言語コミュニケーションの重要性

当該授業では言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションとの関係についても取り上げ、表情・姿勢・態度などの「非言語要因」が時に言語以上の重要な意味を持つとする「メラビアンの法則」[3] を紹介するとともに、本授業の鍵概念である「空間や環境」が非言語コミュニケーションの重要な要素として働くことを指摘した。

文化によって非言語コミュニケーションの様式に相違があり（接触性文化と非接触性文化等）、それぞれに長短があることにも触れつつ、まとめとして、日常生活において役立つ非言語伝達スキルの例示などを行った（ex.対話者との関係による座席の選びかた、呼吸法と発声、会話において言語外情報をキャッチする方法等）。

3-6　学生の反応と理解度

終了時に授業内容を整理した資料を配布し、本授業回での学びや気づき、特に空間と人間の相互作用について、A4レポート用紙1枚にまとめる課題を出した。以下は学生レポートからの抜粋である。

「前回までの授業とはまた違う観点から空間について学ぶことができた。」「人によって臨界距離が違う点が面白い」「『ソーシャルディスタンス』という言葉がコロナ禍よりずっと前に作られた用語だったと知って驚いた。」「日本の非接触性文化がコロナ予防に役立っているのかもしれない。」「先生が教室に入った時に学生への違和感を感じたという話が興味深かった。」「ノンテリトリアル・オフィスを全部無くすのではなく、固定席の部屋の外などに残してはどうか。」「なわばりを無くすことには良さもあるが、ストレスもある。」「呼吸を深くすると相手へのラポールが高まるという話が参考になった。」「呼吸を深くしてみよう。」「中高生の時に、相談室の先生が90度のL字の席に座ったり、隣に座ったりしていた理由もそういうことだったのかと気づいてすっきりした。」「夫婦喧嘩と非言語コミュニケーションの話が笑えました。喧嘩の理由が本人にも分かっていなかったりするのがリアル。」「（オンラインではなく）実際に学校に来て、先生方の授業を聞くとグッと集中でき、内容も頭に入りやすく、その場にいるからこそ分かる雰囲気や非言語コミュニケーションの重要性を感じました。」

配布資料を丁寧にまとめたレポートも多かったが、授業内容を受け止めて、自分ならこうする、という踏み込んだ意見を展開しているものもあり、積極的な反応を感じることができた。

3-7　本章のまとめ

「好適空間」とは何か、「好適空間づくり」のために何を考え、どんな工夫が求められるのか、空間とコミュニケーションの関係に関する基礎的概念と身近な事例の紹介、空間や環境を含む非言語コミュニケーションの関係などを概観する授業であったが、「好適空間論」の広がりと日常生活との関連性についての学生の認識を一定程度高めることができたと考えている。

4．好適空間として最大の単位である地球の現状とエコ感覚

4-1　「地球環境という好適空間」

地球という人間の住処が好適空間として存在しない限り、身近な好適空間の構築は難しい。

地球の温暖化をはじめ、人口爆発と食料問題、プラスチック汚染・・・いま人類は新型コロナウイルス<CIVID-19>(以下、本節では新型コロナウイルスと記す)による感染拡大など様々な世界規模の課題に直面している。その「分岐点」は 2030 年といわれている。このまま放置すれば取り返しのつかないことになる。国連は SDGs という目標を掲げ、国連加盟国 193 カ国が、2030 年までに達成すべき目標を、具体的に設定したにもかかわらず、地球は好適空間どころか、不適空間（生活する上で不適切な空間を本節では「不適空間」と記す）が急速に進んでいるのが実態である。

特に地球の資産を食い尽くす「Earth Overshoot Day」(地球資源超過日)は年々短くなって来ている。いみじくも今年はコロナで生産活動が激減して、ブレーキがかかっているものの、収束後は加速するであろう。そんな中で、私たちがどのように持続可能な住まいを維持できるか、具体的に今を知り、今どのように行動すべきかをこれからを生きる若者たちに認識してもらうことが大切である。

4-2　「知らないということの恐ろしさ」

一つのエピソードがある。地球の生態系については、私たちはほんのわずかしか知らないことをまず認識すべきである。その例を取り上げると、「ブナ」という木があるが、この木は漢字で「橅」と書く。この木にとっては失礼な呼び名となっている。木として役に立たないということであった。実際にこの木は腐りやすく、加工後に曲がり、狂いやすいなど用いにくいので、人間はどんどんこの木を伐採してしまった。その結果どうなったか？山では洪水が頻発した。後に知ることとなったのは「ブナ」はなんと保水能力に長け、落ち葉もスポンジ状態になり、保水し、しかもフィルターの役目を果たし、上質の天然水を作り出していることに近年気づいたのである[6)]。無知とは怖いものである。このように私たちは何も知らないということを、まず自覚すべきであろう。エコは知ることから始まる。

4-3　「生態系という空間の維持」

日本は水に恵まれている。この水という奇跡の液体もまた地球の浄化の役目を果たして来たが、近年この生態系のシステムを破壊するような状態になっている。地球の海水の塩分濃度は平均して 3.5%で、場所によって多少異なるが、それでも 3%台の範囲である[7)]。この適度な塩分が海水の浄化に寄与してきた。不思議である。もし海が淡水なら、微生物の繁殖で、ひどい状態になっていたことだろう。

近年、人間はその便利さから「プラスチック」という素材を活用してきた。その素材を多用したしっぺ返しを現代人はまざまざと今日受けている。気付くのが遅かったともいえるだろう。何でも自由なカタチになり、その多様性から、本来別の素材で作るべきものまで、この「プラスチック」という素材で作り出してきた。それで、今日問題になっているのは「マイクロプラスチック」という問題である。自然に分解し、戻ることのないということを知りつつ、使い続けてきた。原発で出る核廃棄物の処理の方法が分からないまま使用している構図と同じである。「マイクロプラスチック」は海を覆い尽くすという問題だけでなく、空気中にも含まれているという衝撃的な事実である。筆者が企業で商品企画を担当していた 20 年以上も前に、やがて人間が「オールマスク」時代になると囁かれていた。それどころか「オール防毒マスク」時代になると言われていた。その頃は冗談のように言われていたが、今現実になっている。感染症の蔓延も都市への集中、グローバル化、温暖化そして空気の汚染などが深い関わりがあると言われている[8)]。

4-4　「個人として、知るところから始める」

日本人は世界一清潔好きな国民として知られている。それはそれで大切なことではあるが、行き過ぎた＜きれい好き＞が環境に大いに負荷をかけているのも事実である。より白い紙、より整ったカタチの野菜、無臭志向、芳香剤の多用などなど生活スタイル、社会システムを変える必要がある。もう一国で物事をコントロールしている場合ではない。アインシュタインや著名な人たちが表明しているように、世界政府のような統一したコントロールが必須である。日本はかねてから、資源のない国だといわれ続けて来たが、実は世界一の環境エネルギー大国であることを、視点を変えてみて知ることができた。自然エネルギーに囲まれているのである[9)]。個人として更に、全世界的に地球という住まいの住人である一人一人の意識改革という意味で正しく知るという「教育」が必要である。

5．医療における子ども好適空間

5-1　本時の目標と計画

本章は、「好適空間論」授業（全 15 回）のうちの第 11 -13 回授業についての実践を報告する。本時は、医療空間における子ども好適空間の意義と必要な要素を理解し、実際に好適空間を構築することを目的とした。

授業は、以下の計画で実施した。

第 11 回：「病室」のイメージ調査と医療空間に必要な要素について実例を交えて講義する。

第 12 回：国内外の病室、待合室、プレイルームなどの動画を視聴し、医療における子ども好適空間の重要性、問題点を把握する。

第 13 回：子ども好適空間を設計し、学びの振り返りを行う。

5-2　授業の展開と結果

（1）　学生の持つ病室のイメージ

本時の授業前に、病室の持つイメージを調査した。forms のアンケート機能を用い、「病室」と聞いて思い浮かんだ順に 5 つの言葉を入力してもらった。実施は 2020 年 7 月 17 日、回答者数は 54 名、抽出要素は 54 件× 5 である。KHCoder3 により対応分析を行った結果を図 2 に示す。

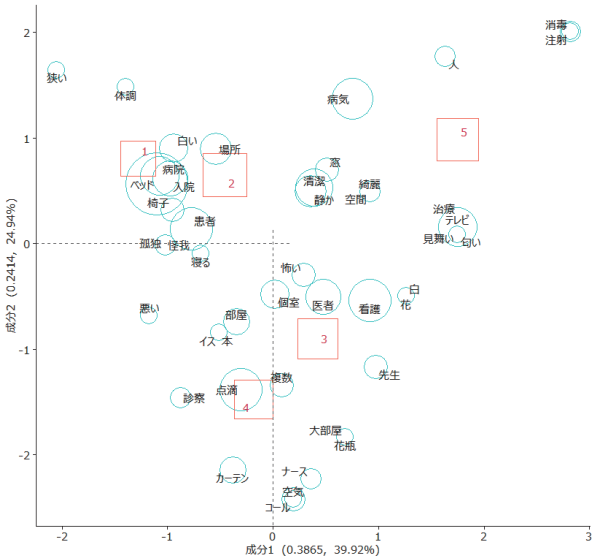

図 2：学習前の病室イメージ

図中の数字は、入力順（思い浮かんだ順）を示す。その結果、思い浮かべるイメージは概ね「場所、物」→「人」→「医療行為」→「環境」の順であることが分かる。その周りに「孤独」「怪我」「怖い」といったイメージの言葉が出現しており、学生たちは医療空間に対して良いイメージを抱いていない。昨年度行った同じ調査では、「白い」「静か」といった語彙が多かった[10]が、コロナ禍の報道などで病室の映像を見る機会が多かったのか、「ベッド」「入院」などの具体的な言葉が多く出現した。

（2）　医療空間に必要な要素の理解

医療環境は、子どもが生活する空間として捉えると、あそびの要素を抜きにして考えることはできない。浦添ら（2001）は、あそび環境としての視点が重要であると強調するが、その一方で、ナースステーションとプレイルームの近接を可能とする建築計画が必要であるとし、このことからも医療空間が特殊な環境であることがわかる[11]。授業では、医療環境の特殊性と必要な要素「点滴棒の持ち込み」「車椅子が通るスペースの確保」等について講義し、好適空間構築の基礎知識とした。

振り返りレポートには「授業の中で 1 番衝撃だったのは、MRI の機械に点滴棒がくっついてしまう動画です。その動画を観ていないと点滴棒が危険だと思うことの方が難しいように感じました。（中略）医療空間の必須条件を学んでから病院の中を覗いてみると確かに！と感じる部分が多い」という記載も見られ、学生は、限られた条件下で子どもが遊ぶスペースを構築する必要があることを理解したようである。

（3）医療における子ども好適空間の設計

本時 3 回目の授業で、医療における子ども好適空間の設計を行った。多くの条件を満たすことは難しいため、医療空間の必須条件は最低 1 つとした。場所は、プレイルーム、待合室、病室、廊下、親子で寛げる空間のいずれかとし、自由に描画してもらった。絵で描けない場合は、言葉による説明を書いてもよいこととした。

学生の作品からは、学習前の病室イメージを変える色合い、デザインが多く見られた。病児の安全、安心に留意した机や椅子、明るい色彩の壁紙、患者の動線に留意した家具の配置など至るところに工夫を見ることができた。

5-3　課題レポートから見た学生の変化

3 回の授業を終え、提出された課題レポートの記述から、医療における好適空間について学び得た結果

を、共起ネットワークに表した。図3にその結果を示す。レポート実施は、2020年8月14日、回答者は56名、回答形式はformsによる。分析はKHCoder3を用いた。

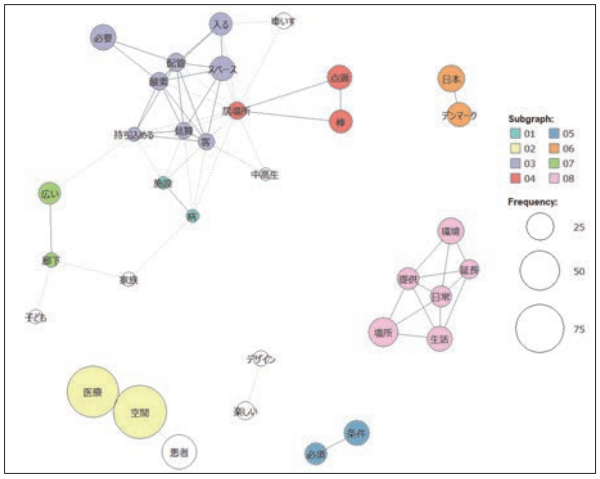

図3：学習後の好適空間理解の様子

生成された共起ネットワークからは、学習後、学生が持つ医療空間についての必須条件を理解した上で好適空間を構築しようとしていることがわかる。また、病室を日常生活の延長線上と捉え、年長者の居場所にも留意している。デンマークのプレイルームなども病院のイメージがプラスに転じるきっかけとなった。「楽しい」「デザイン」等の要素も見られ、学生が好適空間の構築を通して、医療環境の在り方を理解したことが示唆された。

以上の結果から、医療空間に対する学生の考えが多様化したことが本授業の成果であるといえる。

5-4　まとめ

3回の授業を終え、学生は医療においても好適空間が必要であることを学んだようである。以下に、レポートの一部を示し、まとめとしたい。

「病院は病気や怪我を治すことが目的ですが、患者さんが安心して来院してもらえる快適な空間を作ることも一種の治療なのかなと思いました。」

6.　住宅関連およびオフィス空間の好適空間、さらに商業空間の事例

6-1　好適空間　第7回から第10回までの講座のねらいと展開

7回目からは、日本の住宅において好適空間を構築するための知識と技術について解説、さらにオフィス空間の歴史的変遷を学ぶことで、身近な空間について興味を持ち自ら学んでいくことができうるように事例をふまえながら講座を進めていった。加えて商業空間の事例について解説し、主流となっている事業所が提供する好適空間の仕組みやノウハウを紹介していった。

講座の具体的な内容としては、以下のように3級FP技能検定や3級リテールマーケティング（販売士）検定試験、中小企業診断士試験の範囲のとなる運営管理などを含む内容とし、日本における空間を形成するための専門的かつ必要不可欠な知識や技術を中心におこなった。なお、知識の定着を図るため「ふりかえりシート（ミニッツペーパー、B4サイズ）」を導入し[4]、講座の最後で記入、次授業で教員からの「ふりかえり」フィードバックをおこなった。

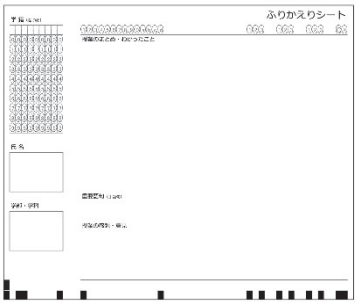

図4：「ふりかえりシート」の見本

6-2　学修の様子と成果

学修の様子を「ふりかえりシート」から概観すると、技術的な講座内容、たとえば照明機器の構造や光源の違いによる明るさの特色などに関しては、「内容が難しい」と感想をフィードバックしてくる受講生が多く見られた。この状況は、本学科が文系であることから起因する特色とも考えられるが、阪口・樋口 2015の研究で提示されている「女性と科学技術」の関係、すなわち社会的意識形成において女性に対する固有のプロセスが社会に存在するという問題12）に関連しているものと思われ、今後の検証必要であると感じている。

そして、同シートにて授業内の重要語として取り上げられたタームのうち、頻度の高かったものに、「科学的管理」[5]があったが、それは「好適空間」講座の特色ともいえる1つになるだろう。1年次生を対象とした講座であったため、まだテイラーの科学的管理法に対する知識が浅く、同管理法をもとに

した空間形成の手法が目新しく、新鮮であったことも一要因であろうが、しかし好適空間に関する根源的な思考については、他担当者から学ぶこともできたであろうため、それと対峙する「科学的」手法について、コントラストが明確になり、その明確さの結果が頻度の高さとして出てきたものであるとの仮説を立てることもできる。同シートの１つには「様々な考えを学ぶことができた」と記載されたものがあったが、それはこの仮定を言い当てているものとみている。

6-3　まとめ

「好適空間」という日本では未開拓の学問領域について、受講生に教授するという担当を与えられたが、その教育内容・成果に関しては、上述のように仮説段階が多く存在している状態であり、検証を進めていく必要を感じている。ただ、受講生の「ふりかえりシート」の記載を重ねて見ていると、この社会における「入手容易性バイアス」や「アンカリングバイアス」の存在を受講生に提示でき、デンマークの好適空間との対比において、現在の受講生自身が置かれた「好適空間」のありかたを見直すきっかけを提示できたのではないだろうか。

7　おわりに

本稿では、５人の教員が「好適空間」という共通概念をもとに、各専門分野における授業を展開した。筆者らは、「デンマークの社会や暮らし」「コミュニケーション」「地球環境」「医療空間」「商空間」といった多様なテーマから授業を展開した。学生たちは彼らなりの「好適空間」を模索し、構築することができたと感じている。

本授業を通して、学生は「好適空間」は、どのような場面にも存在することを体感し、「自らが居住する空間」のみならず、「執務を行う空間」に「hygge」を取り入れるきっかけになったのではないかと考える。筆者らは、今後も、各専門分野での「好適空間」の在り方を検証し、提言していく予定である。

［付記］

本稿における執筆担当は以下の通りである。
黒野：1、５、7　　小宮：3　　西元：4
祝田：6　　林：2

［注］

(1) エドワード･T･ホール(Edward Twitchell Hall, Jr.(1914 - 2009年)は 1966 年に proxemics（近接学）を提唱した。
(2) 動物行動学者のジョン・クリスチアンがメリーランド州ケンブリッジにあるジェームズ島に放たれたニホンジカの副腎をはじめとする器官の組織を 1955-59 年に調査し、疾病と混み合い感との関連性を指摘した。
(3)アメリカの心理学者アルバート・メラニアンが 1971 年に発表した調査に基づく考え方。人が人に与える情報の影響力では言語情報が７％、聴覚情報が 38％、視覚情報が 55％であったとし、非言語情報の重要性を指摘している。
(4)筆者は、講座内の双方向的なコミュニケーションツールとして 2003 年から現在まで「大福帳」を使用しているが、本講座では図表を扱うことも多いため、「ふりかえりシート」を別に設計し使用した。
(5)労働生産性を向上させるための管理理論である「科学的管理法」について、その影響を当時のオフィスレイアウトや事務機器ありかた、またグループ・ダイナミクスの視点からについて講座内で言及した。

［引用文献］

1）佐古順彦・小西啓史（2007）『環境心理学』朝倉心理学講座 12、朝倉書店
2）柴田征司（2016）『環境心理学の視点－暮らしを見つめる心の科学』サイエンス社
3）羽生和紀（2019）『環境心理学第２版』サイエンス社
4)小宮富子(1991)「英語教育と異文化コミュニケーション（1）」岡崎女子短期大学『研究紀要』第 28 巻第 25 号、pp.59-67
5)稲水伸行（2008）「空間密度が行動・コミュニケーションに与える影響―ノンテリトリアル・オフィス移転の事例分析―」MMRC DISCUSSION PAPER SERIES No.227,東京大学ものづくり経営研究センター、http://merc.e.u-tokyo.ac.jp/mmrc/dp/index.html
6）西田尚道（2009）『日本の樹木』学習研究社
7）『たばこと塩の博物館・博物館ガイドブック』2015
8）環境省（2006）『地球温暖化の感染症に係る影響に関する懇談会資料』環境省地球環境局　総務課研究調査室
9）平沼光（2012）『日本は世界一の環境エネルギー大国』講談社
10）黒野伸子、滝沢ほだか、横田典子「医療における「子ども好適空間」構築の重要性　第２報」岡崎女子短期大学『子ども好適空間研究２』pp.20-29
11）浦添綾子、仙田満、辻吉隆,、矢田努（2001）「あそび環境よりみた小児専門病院病棟におけるプレイルームの建築計画に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』66(550)pp. 143-150.
12）阪口祐介、樋口耕一（2015）「震災後の高校生を脱原発へと向かわせるもの――自由回答データの計量テキスト分析から」友枝敏雄編『リスク社会を生きる若者たち――高校生の意識調査から』大阪大学出版会、pp.186-203

[参考文献]

・小俣智子（2015）「 日本の小児がん患者支援への一考察: 北欧における福祉・医療・教育体制の概観及び小児がん患者支援の実際.」『武蔵野大学人間科学研究所年報』（5)pp. 53-70
・桑田耕太郎、田尾雅夫（2010）『組織論 補訂版』有斐閣
・スティーブン P.ロビンス（2009）『新版　組織行動のマネジメント―入門から実践へ』（髙木晴夫訳）ダイヤモンド社
・樋口耕一（2019）「計量テキスト分析における対応分析の活用」『コンピュータ＆エデュケーション』VOL.47、pp.18-24
・樋口耕一(2020)『社会調査のための計量テキスト分析 第２版』ナカニシヤ出版